

一歩一歩が備えられて

加藤 実

中国語を学んですぐ神学校に編入したときによく「中国伝道ですか」と聞かれ、「いや、そのつもりはありません。ただお導きがあればです」と答えたのが、五十年ほど前のことになります。

「香港なら副産物として、大陸から来ている中国人キリスト者との交わりが与えられるだろう。そこから交流の細い道でも拓けるかも知れない」と思ったのが、四十年前の夏 NCC ニュースの片隅に「香港で日本人牧師を求めている」との記事を見つけたときでした。その翌年の4月に教団から宣教師として Hongkong Japanese Christian Fellowship に派遣されました。

「日本人社会を離れてシンガポールか台湾か香港かの中国人社会で暫くでも生活したら、文革で破壊されかねないという古い文化を、身体で感じ

ておけるかもしれない」と思いついたのが、香港四年の中ごろ中共系の映画館で林彪たちが毛語録をふり上げて叫んでいる宣伝映画を観ながらのことでした。そこから CCA の小さな奨学金で台北の台湾神学院に自由な研究生として二年学んだ後、淡水の専科学校で日本語を中国語で教える仕事を84年まで十年続けることになりました。その傍ら台湾の牧師がたの肝いりで発足した国際日本語礼拝なるものを、毎週日曜日の午後にアレンジしていく教務として四年ほど働いたり、後半には当時の台湾基督長老教会の地に着いた勇敢な闘いの真相を、日本の教会に正確に伝える働きに励んだりもしました。

「そうだ、大陸でも日本語を教える場が与えられたら、そこに住んで生活しながら教会の様子も分かっていけるかも知れない」と思い始めたのが、そうした台湾十二年のやはり半ば過ぎでした。当時の状況からしてこうした想いは、親しくなった台湾の先生方にも洩らせず、日本の誰かと手紙で相談するのも危険なところから、とにかくいったん日本でワン・クッションおいてからのこととしました。結果としてトゥー・クッションズになったのですが、84年から湘南と長野の二つの教会で担任教師を務めた後、96年に NCC から南京の愛徳基金会へ日本語教師として派遣され、そこから安徽省の合肥聯合大学へ送られました。

「この展示写真の説明や文書の内容を全部しっかり読んでおく責任が、中国語が読めるこの自分にはある」とふっと強く感じて、合肥の博物館で開かれていた金陵（南京の古い名）祭で立ち止まり立ち止まりしつつ二、三時間、南京大虐殺の全容を大づかみにしたのが、今からちょうど十年前、大陸で働き始めた翌年1997年の5月1日でした。その月の終わりに南京の記念館を初めて参観したのですが、出口の売店で「写真集の類よりも文字ばかりの方が自分には向いていそうだ」となぜか意識しながら買った二冊の内の一冊が、朱成山主編『侵華日軍南京大屠殺幸存者証言集』で、なんとなくそれを日本語に翻訳し始めたのが、『この事実を……』——「南京大屠殺」生存者証言集となりました。

「さぞかしたいへんだったに違いない抗日戦の時

代とその後の内戦期に、中国のキリスト者たちが
どんな風に苦闘していたかが具体的に少しでもわ
かったなら、49年からの社会主義社会での新たな
展開へと繋がったか繋がらなかったかなどが、多
少なりとも理解されてくるのではないか」といつ
た想いが、合肥や南京の教会で礼拝しているとき
に時々ふっと胸を掠めました。『生存者証言集』に
続いて章開沅編訳『天理難容——美国伝教士眼中
的南京大屠殺(1937-1938)』を訳し始めたところ、
それを知って喜ばれた章開沅先生からご自分の研
究所にどうかのお招きをいただき、「抗日戦期の
中国基督者の奮闘」云々をお伝えしたりもして、
五年前から武漢の華中師範大学中国近代史研究所
で客座研究員として翻訳のお手伝いをしています。
その最後となるこの一年<年表で垣間見る中国プ
ロテスタント200年(1807-2006)>づくりに励
んでいるのもあと二ヶ月で終え、帰国いたします。
(2007. 4. 26)

(かとう みのる 協力研究員)

